哲學研究　第八十九號　第八卷第八册

# 佛陀と摩訶毘羅

羽溪了諦

## 一

西暦紀元前第六世紀に入るや印度の政治的中心が婆羅門文化の根據地であつた西部――嚴密にいへば西北部――を離れて、婆羅門的影響のなほ微弱であつた東部に移つた。それと同時に、東部に於ける新しい都市、卽ち摩揭陀(Magadhā)の王舍城(Rājagaha)拘薩羅(Kosalā)の舍衞城(Sāvatthi)、跋耆(Vajjī)の吠舍釐(Vesālī)、嗟彌(Vaṃsā)の憍賞彌(Kosambī)などが非婆羅門主義に立脚せる新文化運動の中心地となつた。當時勃興した新文化運動のうち最も異彩を放つたものは、傳統的教權に反抗して立つた幾多の新[illegible]教運動であつて、原始佛典に所謂六師外道([illegible]a Paribbājakas)[illegible]

に乘じて出現したものであり、且佛教に謂ふ所二見も耆那聖典に示されたる三百六十三見[三]も共に當時の所有異見を一定の範疇のうちに網羅したものであるが、その主張の多くは婆羅門の教權から觀れば異端說であつた。之等多種多樣の新思潮中、當時最も勢力のあつたものは、佛陀(Buddha)及び摩訶毘羅(Mahāvīra)の教法であつた。佛陀は言ふまでもなく佛教の開祖であり、摩訶毘羅は耆那(Jina)卽ち耆伊那教(Jainism)の大成者であつて、西紀前第六世紀から同第五世紀に涉つて、殆んど時代を同じうし、而も同一地域に於て、共に婆羅門の傳統的教權を否認する宗教を宣傳したのである。

之等兩宗教的偉聖が時代を同じうして活動したといふことは、佛陀が跋耆(Vajji)族の舍彌村(Sāmagāma)に留錫せられた時、尼乾子若提子(Nigaṇṭha Nāthaputta)が末羅(Mallā)族の主府波婆(Pāvā)に於て入滅した後、間もなく彼の教徒分裂して、反對黨が互に辯難鬪諍してゐたといふこと[四]、並にその後佛陀が波婆へ赴かれた時、佛弟子舍利弗(Sāri-putta)が佛陀背痛のため佛陀に代つて比丘衆に對して此の若提子の歿後その教徒の分裂した事實を教材として說法したことや[五]、又尼乾子若提子の有力な在俗信士優婆離(Upāli)が佛陀を說服せんと企てゝ却つて佛陀の爲に論破せられて、佛弟子となつ

た爲、若提子は熱血を吐き、それが病源となつて波婆國で命終したことやなどが、信用するに足る巴漢兩阿含經に記載せられてをることによつて推定することが出來る。茲に所謂 Nigaṇṭha Nāthaputta は前示した六師外道の一人であつて、而も摩訶毘羅に相當することはヤコビ(Herman Jacobi)教授及びビューラー(J. G. Bühler)博士の論證あつて以來學界の定説となつてをる。摩訶毘羅は巴利(Pali)語では Nigaṇṭha Nāthaputta と稱せられ梵語では Nirgrantha Jñātṛiputra と呼ばれ、漢譯佛典では尼乾子若提子(舊譯)もしくは泥健連他若提弗怛羅(新譯)と音譯し、離繫親子と意譯せられてをる。まづ離繫(Nigaṇṭha)とは煩惱の繫縛を離脱する意味であつて、摩訶毘羅にのみ特有の固有名詞ではなく、丁度佛僧を一般に比丘(Bhikkhu)と呼ぶやうに、彼の教法を奉持する出家に對する通稱である。次に親子とは親と名くる家族の子といふ義であるが、著那聖典に示されてをる彼の屬した刹帝利(Kṣatriya)種族の名は知者といふ意義を有する Jñātṛi であつて、親(族)の意味ある Jñāti ではない。若し Jñāti が彼の眞の族名であつたならば、彼は巴利語で Nātiputta と呼ばれねばならない。然るに巴利佛典では Nāthaputta と記されてをるのであるから、彼の族名は知者を意味する Jñātṛi であつたらしい。勿論梵語の Jñātṛi に正しく相當する巴利語は Ñātatiṭṭhy つて、Nātha ではないけれ共、之者

は屢佛陀の性質形容語として用ゐらるゝ言葉であるから、知者といふ意義を抽出し得る。故に Jñātiputra に相當する親子といふ漢譯は誤謬であると言はねばならぬ。併しながら、摩訶毘羅の族名を若提 (Jñāti) と傳へた耆那聖典の他の原本があつたのであるかも知れない。そは兎も角も、彼は刹帝利種に屬する若提家に生れ、而も尼乾と稱する出家團の指導者であつたから、釋迦(Sākiya)族に生れた瞿答摩 (Gotama) 系の佛陀が釋迦子瞿答摩 (Gotama Sākiyaputta) と呼ばれたやうに、彼も亦耆那聖典では Nigrantha Jñātriputra と記され、巴利聖典では Nigaṇṭha Nāthaputta と傳へられたのである。

然らば佛陀と摩訶毘羅とは幾年間同時生存を續けたのであるかといふに、不幸にして兩聖の年代が精確に決定されてゐないから、この問題に對して明瞭な解答を提出することは困難である。摩訶毘羅の入滅に關する耆那の傳說には二種あつて、その一は西紀前五二七年說であり、他は同四六七年說である。兩說共に西曆十二世紀以後の資料に基いて推定せられたものであつて、殊に後說の如きは西曆一一七二年に歿したヘーマチャンドラ (Hemachandra) の所傳に據つたものであるが、最近の學者は多く此の說を採用するやうである。併し若し現今東西學界の定說となつてをるやうに、佛滅年代を西紀前四七二——四八五年に置くことが正しいとすれば、前說は佛

陀の成道以前若しくは成道後間もなく摩訶毘羅が入滅したことになるから、佛陀と彼との幾多の間接的交渉に關する佛典の記事から觀て、あまり早きに過ぎ、後說は佛陀が舍彌村(Sāmagāma)に於て摩訶毘羅が波婆で入滅したことを聞かれたといふ確實な佛典の記事と衝突するから、あまりに遲きに過ぎると謂はねばならぬ。耆那教徒の傳說以外に之に關する異說の發展されたものも尠くない。その中最も正確に近いと思はれるのはヘルンレ博士(Dr. Hoernle)の見解である。彼は耆那聖典バガヴァティー・スートラ(Bhagavatī Sūtra)に摩訶毘羅よりも十六年前の彼の法敵末伽梨拘舍羅(Makkhali Gosāla)が歿したといふことゝ、その歿年にクニャ(Kuṇiya)卽ち阿闍世(Ajātasattu)が吠舍釐の王チェダガ(Cheḍaga)と異常な良象を獲んが爲に干戈を交へたといふことゝが記されてをることに立脚して、この戰爭は阿闍世が王位に登つた年に興つたに違ひないといふ推定と、尙彼が父王頻毘婆羅(Bimbisāra)を餓死せしめたのは彼の卽位後間もないことであつて、而も彼の父王逆殺は佛陀入滅より八年以前——ヘルンレ博士は佛滅年代として現今實際上正確なものとして西紀前四八二年說を採る——卽ち西紀前四九〇年であらねばならぬといふ推論とを照合して、摩訶毘羅の歿年を西紀前四八四年と斷定した。[九]

摩訶毘羅の歿年に關するヘルレン博士の如上の斷定は、他の信頼し得べき佛典の記事に照しても、正確に近いやうである。巴利中阿含經に於ける記事に依ると、摩訶毘羅は佛陀と提婆達多(Devadatta)との離反の事實を知つてゐたらしい。佛陀が王舍城の竹林園(Veḷuvana)に住せられた時、阿婆耶王子(Abhaya-rājakumāra)が尼乾子若提子卽ち摩訶毘羅を訪問して、彼より「爾もし沙門瞿曇(Samaṇa Gotama)を論破せば、名聲を得るだらう」と告げられ、且彼に先づ「汝は他人に荒い忌はしい言葉を用ゐるか」と問へ、若し彼が之を肯定せば、彼と他人との間に如何なる相違あるかを問へ、然し若し彼の返答が否定であつたならば何故に彼が「提婆達多は臨終に惱む者である、提婆達多は地獄で苦む者である、提婆達多は長時の沈淪者である、提婆達多は救ふべからざる者である。」(ūpayiko Devadatto, nerayiko Devadatto, kappaṭṭho Devadatto, atekicchо Devadatto.)[10]といふ言葉を用ゐるか、その理由を詰れと敎へられたと傳へられてをる。[11] 之に由つて觀ると、摩訶毘羅は提婆達多が佛陀の赫々たる名聲と絕大な勢力とに對する猜忌の情から、佛陀に對して敵意を抱き、阿闍世王の後援によつて、或は自ら佛陀に代つて比丘衆の首領たらんと企てゝ、佛陀の擯斥を蒙り、或は再三佛陀の生命を奪はんとして果さず、佛陀によつて墮地獄者と呼ばれた事實[12]を知悉してゐたに違ひない。而し

て提婆達多によつて惹起せられた佛陀教團内の分裂紛亂は阿闍世が登極して、その父王頻毘娑羅を弑した前後から始つたのであつて、佛陀は此時七十二歳の高齢に達してをられたのである。[三] 故に摩訶毘羅は佛陀の七十二歳から八十歳に至つて入滅せられた八ケ年の間に歿したと判定せねばならぬから、前者の歿年は後者のそれより八年以上遡ることは斷じて出來ない。ヘルンレ博士は摩訶毘羅の歿年を佛滅二年前に置いたが、之は佛滅年代を西紀前四八二年と想定した上の見解であるから、勿論絶對的確實性を有してをるものではないけれ共、上述の事情を綜合して考へると、彼の説は歴史的に觀て正確に近いと言はねばならぬ。耆那のカルパ・スートラ(Kalpa Sūtra) 一四七に從ふと、[四] 摩訶毘羅は三十年間家主として生活し、十二年以上未完全の狀態にて送り、三十年未滿の歳月を獨在者(Kevalin)として過し、法蘭四十二年、總じて七十二年生存したといふことであるから、三十五歳で成道し、爾後直ちに傳道事業に着手せられた佛陀は、摩訶毘羅よりも十年許り早く社會的活動を開始せられたことになる。併し兩聖の生涯の殆んど全部が時を同じうしたことは爭ふことの出來ない事實である。

註 (一) Dīgha-Nikāya, II, Sāmaññaphala-sutta, 2—33. (P. T. S. Vol

(二) 長阿含經第十七、沙門果經。(呉九、八七

一八校。

The Life of the Buddha, tr. by W. W. Rockhill, PP. 96—105.

(二) Dīgha-Nikāya, I, Brahmajāla-sutta, 28—72. (P. T. S., Vol. I, PP. 1—46.) 長阿含經第十四、梵動經。(吳九、七二一六校)
梵網六十二見經。(吳十、九〇一五校)。

(三) F. O. Schrader, Ueber den Stand der Indische Philosophie zur Zeit Mahāvīras und Buddhas, S. 2—4.

(四) Majjhima-Nikāya, 104, Sāmagāma-sutta. (P. T. S., Vol. II, P. 243.) 中阿含經第五十二。大品周那經。(吳七、五五校讀)
〔參照〕 Dīgha, XXIX. Pāsādika, 1. (P. T. S., Vol. III, PP. 107—8.)(漢譯缺)

(五) Dīgha-Nikāya, XXXIII, Sangīti-sutta, 6 –7. (P. T. S., Vol. III, PP. 209—11.) 長阿含經第八、衆集經。(吳九、四十一校讀)

(六) Majjhima-Nikāya, 57, Upāli-sutta. (P. T. S., Vol. I, P. 387.) 中阿含經第三十三、優婆離經。(吳六、五九校讀)
漢譯には「尼揵親子即吐血、至波羅國、以此惡事、詣彼命終」と記してあるが、巴利原本には只吐血のことのみを傳へて、命終に關する記事が缺けてゐる。命終のことは勿論、吐血のことも充分疑ふ餘地のある傳說ではあるが、巴漢兩本に見えてゐる記事であるから、今資料として採用したのである。巴利原文は次のやうに記されてゐる。

Atha kho Niganṭhassa Nātaputtassa Bhagavato sakkāraiṁ asahamānassa tatth' eva uṇhaṁ lohitaṁ mukhato uggañchīti.

(七) S. B. E., Vol. XII. Intro., XV.

Dr. Bühler, Ueber die Indische Sekte der Jaina. tr. to Enghlish by Burgess, P. 29.

(八) Ācārāṅga-sūtra,II, 15, 4. (S. B. E., Vol. XXII, P. 191.)

Kalpa sūtra, 89 : 90 : 110. (S. B. E., Vol. XXII, PP. 248, 256.)

(九) Hastings, Encyclopaedia of Religion and Ethics, Vol. I, PP. 260—1.

(10) ヘイヤヘ氏は Kappaṭṭho Devadatto を Zwecke sucht Devadatto と譯してゐるが、この場合之では意味が通じない。同氏の註して居るやうに此の場合 Kappaṭṭho は Suttanipāta (V. 373, 521, 517, 860.) に見えてゐる Kappātito の反對の意味に取る

方が適當であらう (Neumann, Die Reden Gotamo Buddhas, Band II, S. 88, 669.)。故に余は之を Kappattho と觀て譯したのである。

(二)Majjhima-Nikāya, 58, Abhayarājakumāra-sutta (P. T. S., Vol. I, PP. 392—3.)

(三)The Vinaya Piṭakaṁ, Vol. II, Cullavagga, VII, 2—4, PP. 186—98.
S. B. E., Vol. XX, PP. 233—65.

(四)H. Kern, Manual of Indian Buddhism, P. 38.

(五)S. B. E., Vol. XXII, P. 269.

## 二

前述したやうに、摩訶毘羅の傳道開始は佛陀のそれよりも約十年遲れたけれ共、彼の三十年間の活動によつて、拘薩羅・韋提波(Videha) 摩揭陀及び鴦伽(Aṅga) など、現今のオウド (Oudh) 及び西方ベンガル (Bengal) に於けるティルフット (Tirhut) 並にビハール (Bihār) 諸州に敎勢を布殖擴張して佛陀に取つても最も怖るべき法敵となつた。摩訶毘羅が鴦伽の主府瞻波(Champā)韋提波王國のミティラー(Mithilā)拘薩羅の主府舍衞城その他主として彼の鄕土の都吠舍釐及び摩揭陀の主府王舍城に於て雨期を過したといふカルパ・スートラの記錄に依つても彼の勢力範圍を推知することが出來る。而も彼は摩揭陀國王頻毘娑羅その子阿闍世王 B. I. PP. 47—の親族と屢々會見して、彼等

王族を始めとして他の貴顯紳士から非常な尊敬を拂はれ、尙又當時の上流社會の中から多くの歸依者を獲たのである。彼の歸依者として佛典に傳へられてをる人々の中に離車(Licchavi)族の學識ある王子阿婆耶(Abhaya)[一]摩揭陀國王頻毘娑羅の王子で耆那敎團首領株の一人であつた同名の阿婆耶[二]摩揭陀國王の出納官(Setthi)の家族に生れた女性バッター(Baddā)[三]俱盧(Kuru)王國の婆羅門族で學術技藝の素養深きナンヅッタラー(Nanduttarā)[四]、舍衞城の議員の家族であつたアッジュナ(Ajjuna)[五]、舍衞城の出納官たるミガーラ(Migāra)[六]及び吠舍釐城の辯證法に長ぜる雄辯家サッチャカ(Saccaka)[七]など、當時の文明社會に於ける各方面の有力者がをる。斯くの如く、彼は王舍城舍衞城吠舍離城などの新文化の中心地たる都市に於て有力な信徒を獲たばかりでなく、舊文化の本源地たる俱盧地方の婆羅門にまでもその感化を與へたのである。就中彼は離車族の間に深く根ざせる勢力を擴大したのであつて、現に彼の歸依者の中には吠舍釐に於て最高地位を占めてゐた人々があつた。巴利律本に依ると、離車族の總大將たるシーハ(Sīha)も亦元彼の信者であつた。

或日有力な離車族の多數が吠舍釐の議事堂(Santhāgāra)に集つて頻りに佛法僧の三寶を讃歎してゐたのを聞いたシーハ將軍は、かく有力な彼等が共に三寶を讃歎す

るからには、その教主沙彌瞿曇は眞の佛陀阿羅漢であるに違ひないと考へ、その師尼乾子若提子の止むるをも聽かず、遂に佛陀を訪ひ、その法雨に浴して、佛教信者となつたのである。けれ共、當時吠舍釐に於ける摩訶毘羅の信徒の數が甚だ多くあつたことは、シーハ將軍が歸佛後、佛陀及び比丘衆をその邸宅に招待して、彼等に供養する爲に市場から肉を取寄せた所が、多數の尼乾子の徒は吠舍釐城内到る所の街衢で、臂を張りつゝ、「今日シーハ將軍は大な牡牛を屠つて、沙門瞿曇の爲に食を設けた。沙門瞿曇は此の目的の爲に殺された動物の肉を知りながら食ふてをる。それで彼は事實上其の業(動物殺害)の作者となつた。」と叫び廻つたといふこと[九]に依つて想像することが出來る。固よりシーハ將軍は彼等尼乾子の徒の佛陀に對する嫉妬から放つた斯る讒誣によつて心動かされることなく、篤く佛陀に奉仕したのであるが、茲に特に吾人の注意すべきことは、當時吠舍釐に於ける尼乾子の徒がシーハの如き顯要の地位にある大人物に反抗するに足る實力を有してゐたことである。而して彼が佛陀に歸依したのは佛陀が最後に吠舍釐を訪問せられた時であつて、[一〇]此の事實は佛陀が幾度も吠舍釐に於て熱心な傳道を繰返へして、摩訶毘羅の教徒中から多くの改宗者を獲られたけれ共、なほ彼の教徒が離車族の士府に於て多數を占め、勢力を有してゐ

たことを證明してゐる。尚又先きに擧げた、吠舍釐の辯證に熟達せる卓拔な雄辯家で尼乾子の子でつつたサッチャカが佛陀を論破する目的を以て、五百人の離車族を率ゐて佛陀を訪問し、彼等の面前で哲學的論議の排戰を試みるほどの勇氣のあつた所から觀察しても、吠舍離が佛教と耆那教との接戰地であつて、而も摩訶毘羅が佛陀よりも早く離車族の間に教化を布き、大成功を遂げてゐたことが判る。

以上は摩訶毘羅の勢力の中心地たる吠舍離に就いて、佛典に於ける記錄に基いて論じたのであるが、彼の教化が當時の新興國の新しい都市へ著しく行涉つてゐたことは重ねて言ふを須ゐない。彼は佛陀と同じく先づ當時の富豪階級及び貴族社會へ布教した。從つて彼の歸依者後援者の中には王族が尠くなかつた。耆那教の二大分派たる空衣派(Digambara)及び白衣派(Śvetāmbara)の傳說には、彼が訪問した王名を來げ、韋提波王チェタカ(Cetaka)が彼の教團の保護者となり、鬚伽王のクニカ(Kuṇika)が彼に最も鄭重な歡迎の意を表し、憍賞彌(Kobambi)の王サターニカ(Satānika)は彼を屈請して法を聽き、歡喜して遂に彼の教團に入り、王舍城の頻毘婆羅王も亦彼によりて多くの信仰上の問題を十全に解答せられて、彼の歸依者になつたといふことが告げられてをる。[二]併し彼の感化は、啻に上流社會にのみ限られたのではなく、一般民衆

の間にも徹底してゐたことは、尼乾子でない外道の徒輩が尊敬を拂はれんがために、尼乾子を模して裸形で遊行したといふこと、及びかく身體を露出するがために民衆は尼乾子の聖者として彼等を尊崇したといふことに依つて推知し得る。[二] 何となれば、若し摩訶毘羅の教團が當時の社會の上下を通じて重きをなしてゐなかつたならば斯る模倣の意義を解することが出來ないからである。カルパ・スートラ(一三四―七)に從ふと、摩訶毘羅が入滅した時にはインドラブーティ(Indrabhūti)を上首とせる一萬四千の沙門とチャンダナー(Candanā)を上首とせる三萬六千の比丘尼とシャンカシャタカ(Śaṅkhaśataka)を首領とせる十五萬九千の優婆塞とスラサー(Sulasā)及びレーヴァティー(Revatī)を首領とせる十八萬の優婆夷とより成る尤然たる一大教團が確立してゐたのである。

然らば、摩訶毘羅が三十年の活動によつて斯る尤大な教團を組織した原因は何であつたらうか。固より彼の偉大な人格的感化がその主な原因の一つであつたには違ひないが、彼の事業を成功せしむるに都合の好い色々の事情の存してゐたことが、與つて力あつたことを觀過してはならぬ。

摩訶毘羅は佛陀と同じく當時印度の政治經濟文化の各方面を通じて最も重要な

地位を占めてゐた刹帝利(Kṣatriya)族に生れ、そして當時最も優勢であり宣揚新興國の諸王と血族關係を有してゐた。即ち先きに擧げたチェタカ王も頻毘娑羅王も阿闍世王も皆彼の母系の親族であつた。[一三] かゝる有力な王族を背景として立つた彼は當時の諸王族を始めとして一般庶民から尊敬を拂はれたから、貴族社會に對する教化はいふに及ばず、民衆に對する宣教上多大の便利を得たことは疑ひを容れない。次に彼の成功を助けた他の事情は、彼の宗教運動に對する準備が夙に施されてゐたことである。彼は佛陀の如き新宗教の開祖ではなくて、歴史的に言へば、バールシュヴ(Pārśva)の宗教の大成者であつた。著那教の傳說に依れば、バールシュヴは第二十三代の豫言者(Tīrthaṅkara)であつて、第二十四代の最後の豫言者たる摩訶毘羅より二百五十年以前に入滅したといはれてをる。[一四] この年數の信用し難いことは言ふまでもなく、且又バールシュヴ以前の豫言者も歴史的人物と看做し難いが、バールシュヴの實在してゐたことは多くの學者の認むる所であつて、殊にヤコビ教授の如きは佛陀時代にバールシュヴの弟子が實際存在したこと、及び尼乾子は佛陀の生涯中に設立された宗派ではなく、それより前に成立してゐたものであることを主張してをる。[一五] 若し果して然りとすれば、摩訶毘羅の教說中最も大切な五戒即ち不殺・眞實・不盜・梵行・無

著の大部分、詳しく言へば、梵行を省いた餘の四戒は、バールシュヴによりて夙に宣傳せられてゐたのである。[一六] その他耆那教義の一特色たる命(jīva)の思想が佛陀當時すでに一般民衆の間に吹込まれてゐたと觀るべき理由がある。巴利律本の所傳に依ると、佛陀がベナレス(Benares)に住せられた時、不法の實行者で屢々佛陀を煩はした六人組比丘衆(Chabbaggiyā Bhikkhū)が佛陀によつて穿つことを禁止せられた木製靴の代りに棕櫚(tāla)の葉で造られた靴を着けたところが、若い棕櫚樹が枯死したものであるから、民衆は植物の生命(jīva)を破壞する比丘衆に對して不平を放ち憤怒を燃したそれ故佛陀は比丘衆に對して、民衆は樹木に生命が宿つてをると信じてをるからといふ理由で、若い棕櫚の葉を以て靴を造ることを禁ぜられた。[一七] 茲に吾人の注意すべきことは、當時の人々が一般に樹木に命(ジーヴ)の存することを信じてゐた點である。後に詳說するが、原始耆那教に於ける命の思想は個々の生物の中に存する生命といふ意味を根柢として、稍實體化されたものであつて、一面に於て永劫不滅の靈と同意義に用ゐられたが、他面に於て五感官を有するものは言ふまでもなく、所謂一感官のみを有する火風等に至るまで、命の實在を認めたから、物活論的面影が判然と觀取されれる。故に摩訶毘羅の說に從へば、一切の植　　勿論命の所有者で　　ら、佛陀當

時一般の人々が樹木に命が宿つてをると信ぬたことは、全く彼への影響であると考へられないこともない。が併し、かゝる物活論的見解は奥義書(Upaniṣad)に於ける我(Ātman)の思想が無知階級の間に通俗化すれば、容易に發生し得べき性質のものであり、假令奥義書の思想系統を離れても、民間信仰として自ら獨立して興り得るものである。故に當時一般に信ぜられてゐた此の思想は專ら摩訶毘羅の布教によつて釀成されたものと斷定することは出來ないけれ共、彼の先驅者たるパールシュヴ以來尼乾子の徒の活動によつて民間に植付られたものと觀てよからう。その由來は兎も角も、かゝる信仰が民間に流布してゐたことは、摩訶毘羅の布教上非常な便益があつたに違ひない。尙一つ摩訶毘羅が當時社會の上下を通じて歡迎せられた所以は、彼の熱心に力說主張した不殺(ahiṁsa)の教誡に在つたと思はれる。勿論、婆羅門教も佛教も共に不殺生戒を說いたけれ共、摩訶毘羅の嚴正にして熱誠な態度には及ばなかつた。實際、外面的には摩訶毘羅の宗教は不殺と苦行との實行を生命とするものゝやうに見えたであらう。大體生物を殺害せないといふ信條のうちには、慈愛ゆたかな氣分が漲つてをる。かゝる物やさしい宗教的情操は當時戰雲を以て覆はれ、斷えず慘憺たる流血に脅やかされてゐた東部印度の人心をひきつけたことは

疑ひを容れない。佛陀出世より少しく以前に所謂中國(Majjhima Deśa)に割據してゐた十六大國(Solasa Mahā-janapada)は、佛陀時代に至ると其の政治的勢力に變化を來して、迦尸(Kasi)は拘薩羅に征服せられ、犍伽は摩揭陀に併呑せられ、阿説迦(Assakā)は縛帝(Avanti)に從屬し、摩揭陀・拘薩羅・嗟彌(Vaṃsā; Vatsa)及び縛帝の四大新興國が政治界の中心勢力となり、縛帝の波羅殊提(Chaṇḍa-Pradyota)、嗟彌の優陀延那(Udayana)、拘薩羅の波斯匿(Pasenadi)並にその王子毘ヅーダバ(Viḍūḍabha)及び摩揭陀の頻毘娑羅並にその王子阿闍世等は摩阿毘羅及び佛陀と同時代の王であつて、彼等諸王は互に婚姻政策を以て同盟を結び、それが爲却つて繁く、戰爭を惹起したのである。要するに彼等兩聖の時代は印度の政治的勢力の變動時代であつたから、新興國の割據してゐた東部は戰亂の巷となつたのである。かゝる殺伐な生活に惱まされ、流血の慘を厭ふてゐた東部の民衆に取つては、摩阿毘羅の嚴正な徹底的不殺の宗教は無上の福音であつたことは想像するに難くない。これが彼の宗教運動の成功した主な原因の一つであつた。

註 (C) Aṅguttara-Nikāya, III, 74. (P. T. S, Vol. I, PP. 20—1.)

(H) Majjhima-Nikāya, 58, Abhayarājakumāra-sutta. (P. T. S, Vol.

Psalms of the Early Buddhist, II, Psalms of the Brethren, pul. T. S., P. 30.

(四) Psalms of the Early Buddhists; The Sister, published by P. T. S., PP. 63—7.

(四) 同上、P. 57.

(四) Psalms of the Early Buddhist, II, Psalms of the Brethren, published by P. T. S., P. 83.

(六) Dhammapadaṭṭhakathā, Visākhā Vatthu. (P. T. S., Vol. I, pt. II, PP. 384 ff.)

Buddhist Legends, tr. by Burlingame. (H. O. S., Vol. 29, PP. 61 ff.)

(四) Majjhima-Nikāya, 35, Cūlasaccaka-sutta. (P. T. S., Vol. I, P. 227.)

サッチャカは尼乾子の子(Nigaṇt. haputta)であつたれ共、彼の論議から觀ると眞の若那教徒とは言ひ難い。併し彼は佛陀に論戰を挑むだほどの人物であるから、假令彼が若提子を論破したりとは誇るやうに見えても、それは單に論客として自負心に過ぎぬと解すべきであらう。兎に角彼は尼乾子の家族に生れたものであるから、若提子に關係あるものとして茲に加へたのである。

(八) The Vinaya Piṭakaṃ, Vol. I, Mahāvagga VI, 31, P. 233.

S. B. E., Vol. XVII. P. 108.

(九) The Vinaya Piṭakain, Vol. I, P. 237.

S. B. E., Vol. XVII, P. 116.

(10) B. C. Law, Historical Gleanings, P. 85.

(11) Mrs. S. Stevenson, The Heart of Jainism, PP, 40—1.

(111) Dr. Bühler, Ueber die Indische Sekte der Jaina, tr. to English by Burgess, P. 36.

(111) S. B. E., Vol. XXII. Introduction, P. XV.

(四) S. B. E., Vol. XLV, P. 122, n. 3.

(16)同上、Introduction, PP. XXIII.
(17)同上、P. 121.
(18)The Vinaya Piṭakam, Vol. I, Mahāvagga V, 7. PP. 189—90.
S. B. E, Vol. XVII, PP. 21—2.

## 三

佛陀の遊行範圍を調べてみると、摩訶毘羅のそれと殆んど一致する。佛陀の教化せられた地方も亦同じく拘薩羅、韋提波及び摩揭陀であつて、佛陀は拘薩羅の主都舍衛城及び摩揭陀の主府王舍城に最も大きな教團の中心を構へ、尙又摩訶毘羅の中心勢力地であつた吠舍釐に於て多くの住民を教化引入し、波斯匿、頻毘娑羅及び阿闍世等の諸王と佛陀との交渉並に彼等の歸佛が佛典に傳へられてをる。惟ふに當時の諸王は爾後の印度諸王と同じく、それが正法である以上は一切の宗教に對して敬意と同情を拂ふたのであつて、當時の諸王も亦當時の二大宗教たる佛教にも耆那教にも充分の崇敬と保護とを加へたのであらう。

斯くの如く、兩聖が同一地方で同一時期に而も對立的に活動してゐたとすれば、兩者教團の衝突は勢免れ難いことであつたに違ひない。(p. 392.) 從つて佛典はこれに關する

傳說が可なり豐富に保存せられてをる。然るに、耆那經典には所謂邪命派(Ājīvika)の開祖末伽梨拘舍羅との交涉に就いては詳しく記載せられてをるが、佛敎との關係に就いてはその傳ふる所實に寥々たるものである。佛敎側の傳說に依れば、尼乾子にして佛敎に改宗した者が頻々續出してをる。卽ち前に揭げた離車族の有識王子阿婆耶、頻毘娑羅の王子で耆那敎團の首領の一人であつた他の阿婆耶、離車族の總大將シーハ、舍衞城の出納官たるシガーラの如き有力者を始めとして、摩揭陀國王の出納官の家族であつた婦人バッダー、俱慮國の婆羅門族で學術技藝のたしなみ深きナンヅッタラー、舍衞上の議員の家族であつたアッジュナ、那爛陀(Nālandā)に於て佛陀と心業と身業とのいづれが重きやを論じた若提子の弟子ディーガタバッシー(Dīgha'apassī)、彼から佛陀との論議の樣子を聽いて、意業の罪が最も重いと言はれた佛陀の說に贊成して佛陀に歸依した爲摩訶毘羅から狂人呼ばりをされた王舍城の家長優波離(Upāli)、舍衞城に於ける佛陀の歸依者シリグプタ(Sirigupta)の兄弟で彼の機智に富める引導によつて佛徒となつたガラハディンナ(Garahadinna)の如きは、いづれも元尼乾子の徒であつたが、後佛陀若しくは佛弟子の敎化に遇ふて佛敎に歸依するに至つたのである。耆那に關する佛典の記事は大體に於て正確であつて、耆那經典スートラ・ク

リターンガ (Sūtrakṛitāṅga) ウッタラーディヤヤナ (Uttarādhyayana) などの所說と一致する點が多いのであるが、何分にも法敵に關する記錄であるから、故意に中傷した場合が尠くない上に、無意識的に誤謬を傳へてをる箇所もないではない。併しかゝる缺點は啻に佛敎側にのみ存するのではなく、佛敎に關する耆那經典の所傳にも共通してをる。佛典には如上の多數の有力な耆那敎徒が佛陀に轉向したことを傳へてをるにも拘らず、耆那經典にはかゝる傳說は一つも記されてゐない。勿論かゝる事件は耆那敎に取つて不名譽なことであるから、知つてゐても殊さら傳錄することを避けたのであらう。果して然りとすれば、彼の敎團中からかくも有力な多數の人物を奪去られたといふことは、耆那敎に取つて一大打擊であつたに相違ない。而も耆那側の記錄には、佛陀の弟子にして彼に改宗した者のあつたことを些しも傳へてゐない。若し之があつたとしたならば、多少その消息は漏さるべき筈である。要するに、佛陀は摩訶毘羅の敎徒に對して常に積極的傳道の態度を取られたのであつて、之は佛陀が彼の根據地である離車族の地方へ遊行して、吠舍離に於て顯要の地位を占めてゐた尼乾子の徒を化導し、その敎線を擴張せられた事實に徵して明かである。

所が、茲に一つ不可解の疑問が起る。佛陀と摩訶毘羅とは同一時期に同一地方を

遊行し、而も前者は後者の弟子の多くを化導して改宗せしめたにも拘らず記錄に徵する限り、兩者が一度も會見せなかつたのは何故であらうか。若し兩者直接會見の事實があつたならば、必ずや小說的扮裝を以て後世に傳へられたであらう。佛陀は出家後摩揭陀國に出で、諸仙を歷訪して道を求められたのであるから、成道後は會はれなかつた爲、記錄には遺されなかつたけれ共、その求道時期に於て摩訶毘羅を訪はれたかも知れないといふ想像を運らす人がないとも限らぬ。併しながら此の想像も決して正鵠を得たものとは言へぬ。何となれば、佛陀成道以前はなほ摩訶毘羅の在家時代若しくは修養時代であつたから、佛陀はかゝる無名の沙門に向つて敎を請はれなかつたであらう。假令偶然彼に遇はれても、一介の苦行者として顧られなかつたに違ひない。

然らば、兩聖が敎化峙代に入つてもなほ直接會見せなかつたことは、如何に解釋すべきであらうか。殊に轉法輪の決意を以て正覺の座を起つや、自ら奮進して五比丘を始めとして、當時の敎界に於ける重鎭であつた三迦葉(Kassappa)兄弟を敎化した佛陀が、何故摩訶毘羅に會見して彼を說服せなかつたのであらうか。之は何うしても佛陀が故意に彼と會見することを避けられたのであると觀る外はない。大體、佛陀

は布教に就いては終始非常に愼重な態度を保たれたのであつて、現に佛陀伽耶(Buddhagaya)に於て成道せられ、法輪を轉ぜんと決心せらるゝや、まづ何人に向つてその甚深の法を說くべきかと考察し、鹿野苑(Migadāya)に於ける五比丘を第一に濟度せんとて、百七十餘哩の道程を步行せられた。その間凡そ一週日を要するから、多くの人々に出遇ひ、多くの人々から供養を受けられたに違ひない。然るに、佛典に徵する限り、佛陀はその途中邪命外道に屬する優波迦(Upaka)の問ひに應じて、無師獨悟なることを答へたばかりで、一句の法も說かれなかつた。[六] 惟ふに佛陀はその法を解するに違ひないと見込まれた五比丘に對して初轉法輪を試みるまでは、何人に向つても輕々に說法せられなかつたのであらう、又その道中一週日の間に如何にその所證の法を表現すべきかに就いて考慮せられたのであらう。以て佛陀の布教的態度の眞摯であつたことを窺知することが出來る。

佛陀の愼重な傳道的態度は成功の見込みなき者に向つて無暗に教化を試みることを避けしめたに違ひない。今佛陀が摩訶毘羅に向つて自ら進んで直接教化を施さなかつたのも畢竟ずるに佛陀にその成功の確信がなかつた爲であらう。當時摩訶毘羅はその教勢に於て、その德望に於て、佛陀に優るとも劣ることなき實力を占め

てゐた。實に兩聖は當時の敎界に於ける二大明星であつた。それで若し兩聖が會見した結果、いづれかゞ論破せられたならば、勝敗いづれの側に在つても、互に再び起つことの出來ない致命傷となつたであらう。故に兩雄滿を持して放たざる態度で生涯を送り、互に故意に直接の衝突を避けたのであらうと思ふ。

註 (一) 以上の人物に關する傳說に就いては第二節の註(一)より(八)までを參照せよ。

(二) Majjhima-Nikāya, 56 Upāli-sutta. (P. T. S., Vol. I, PP. 371—4.)

(三) 同上。PP. 374—87.

(四) Dhammapadaṭṭhakathā, Vol. I, Pt. 2, PP. 434—47.

Buddhist Legends, Pt. 2, (H. O. S., Vol. 29.) PP. 92—9.

(五) S. B. E., Vol. XLV, Introduction, by Jacobi, PP. XV—XX.

(六) The Vinaya Piṭakaṃ, Vol. I, Mahāvagga I, 6, 7—9. P. 8.

S. B. E., Vol. XII, PP. 90—1.

（未 完）